

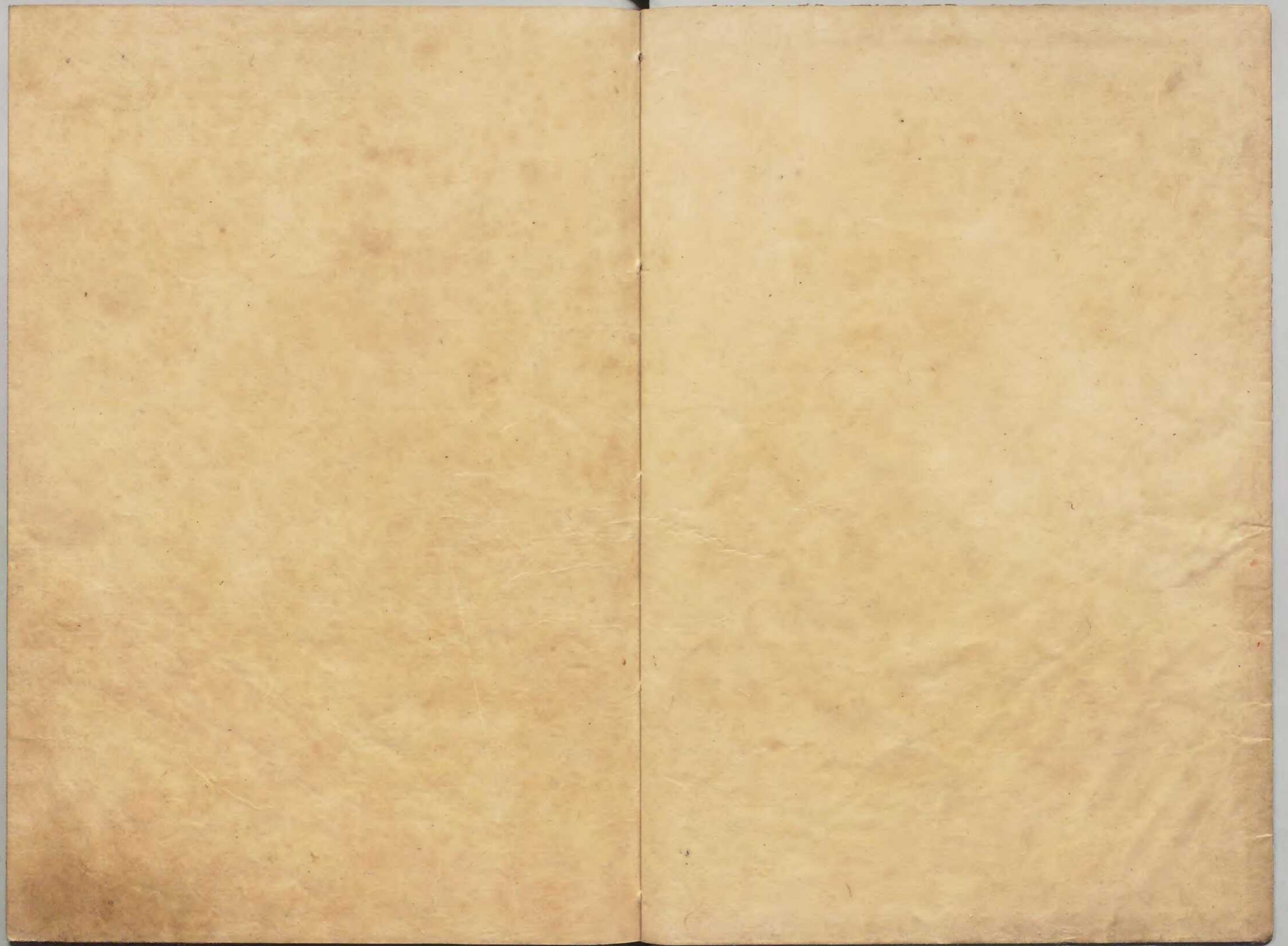
寛永諸家譜

藤原氏兩十冊之内三
秀郷流

内閣文庫		
番號	和	20199
冊數	186(89)
函號	特	76 1



裏面記載のない箇所は省略



日藤

寛永諸家系圖傳

藤原氏

丙三 小家

秀郷流

内藤

浅草文庫

● 秀郷

後四位下

武藏守

房前五代乃後胤下野大掾村雄の子
貞盛朝長此副將軍とありて平将門

を講じ世よ懐友太く事以

千晴

鎮守府右軍

千清

正頼

下野守

頼遠

五郡丈大吏

頼清

近江佐下

頼俊

左近将監

行俊

内蔵掾

以後く断後

某

内蔵右京進

中園三河

法名善白

兩ハ
新
行後
内藤備仗

祖父も 信忠主小治久志とく
軍切あり 志道小しりく 名京進
りり 三列と野乃城を去る

某

赤次右衛尉 法名函鑑

上野乃城主 たり

二僕の城高つとむり 教年あり

城中 一とむり 病死と 婦子家長お

續く 善代治とむり あり びと 氏田也
教度あり たり

家長

赤次右衛尉

永禄十二年

東照大権現今川氏素を攻を川乃城を

圍 たり たり たり たり たり たり

をく 浦人攻たり かり け 良内殿 あり あり

鉄炮ありて倒敵これ首級
うんと城中より突てあげしとき
敵を敵と討つべしと尋ねる死
しるすし海をわかれぬ
天正三年冬篠合戦の時吉田勝頼が
この見ればその群といて池をくぐりけり
家もろくびよ叙父もなまけりけり
是と討つべしといへし相見の者逃りぬ
織田信長つひをまづくを勇と感

たまたま

同四年

大指現二俣乃城と攻しゆり討敵兵
物比奈浦村相平九郎と討し
とすすまふをひと家も浦兼の合
戦乃浦兼を討家も浦兼九郎の
首をうんと城中よりけりおとす
浦の志れを討つべしと物比奈先
物比奈の志を討つべしとぬりけり

城之菅原田之此夫と云河目向と云
と云状よい〜〜〜近代無双今辨慶と称
と云〜〜と云

同七年

大権現御飯原乃城之藤之海平と云
と云之田中乃城と縮と云しと
おが〜〜ありと此津自身相見の
ふまた〜〜六跨少〜〜沙おるあり歎
これと云〜〜此と云〜〜

大権現侍臣〜〜命と云と云れと云ハ
と云〜〜給ふと云れ〜〜も 尊家と
と云〜〜と云〜〜の〜〜と云〜〜
をひ〜〜家と云作と云名〜〜海と云
一辨系と云〜〜と云〜〜と云〜〜
と云〜〜歎と云ひ〜〜と云〜〜と云

同九年

大権現田中持舟乃苗と云〜〜あり〜〜
五月甲子と云同日と略五日と云枝小

浄宿ありく石川伯耆守と云ふ
持舟乃勢を返す
之れ石川同心板倉源十郎石川
三島左衛門家老と属する
今日乃軍は汝が進退よく
あり家老を許容しぬ
城自的攻系駿守兵とす
汝を去る石川一あり
心勝よのりく返と進城際

いさく二十余人をらる家老
款二騎をつさせて板倉石川と
うれ首を

同十二年冬長秀吉尾列
りり濃列
澁川と引合
大指現
酒井備後守

撃らるる寸歌うれ城よりりく浦より
すくふをひく軍方より攻りこらし前田
の遊より家名うれを攻るより
歌うつこわく坊うかぶと記よ歌
鐘眼よりうらく教人を村らりか
必し歌無しとじ事あるはずよ
をひく火筈と射遊より門を焼拂
攻へく外郭をうらこれより家名
島垣も浦よりありて戦死し

同十二年石川伯耆守教正秀吉より
畠山をさしりて大坂よりしり
大指現演松より畠山より梅よりしり

家名をりよきし伯耆守の同十八年
あづけよせよ浦よ

同十八年秀吉小幡氏政と証す現

大指現教万濟氏と率く岩根よ
乃りりよ浦よ時秀吉家名より

甲申乃卷之表をみくも名をよ
鉄炮三十挺を家名よし備ふ

文治五年

大指現上松原勝を証し備ふんそ

六月一、津進段あり家名よしひよ

為若若者清の尉松平主殿物同也其尉

とよび家名よし小一郎等小命にて

伏見乃城と備ふりしめ給ふ時石田

三成も備ふ謀叛し上方蜂起も既小

七月十二日四万餘騎乃益をきつて伏見

乃城を圍家名殿自よ乃かり備ふ

火矢と射て穿れ侍やしと焼けきむ

寄手火よおとろくすしそえす

為若らしひよ家名松丸とせり搦

乃橋と截れとんもすりしり

恒見和泉守もせしり橋を截せり

しせきたるひりしり乃とふしひと

又と備ふ一ありしり乃とふしひと

まのふりくましく垣見ひこきりせぬ
この藪つ井は橋を截とすあり
をひく歌うみせし事とて小
十余日あり城中より突くお戒を
竹束を焼あひの理草をやさ拂
くく浦をくく居せし同月二十九日
松丸一り回通るものありく城を焼て
寄とひひいふ翌日よりく浦ま
て餘燧燭も逆風吹廻く本丸

丸のまら
丸一り焼りくひぬまにひひく
家小一島なまひは島後等と
くく死と時一歳五十五 法名
長昌

伝成

之左衛門尉 乃らを前守と号ひ
家名や一ひひこ子と系名あり
小ひひひ

政長

左馬助 後四位下

天正十二年長久手合戦乃とて

父子とも小幡乃城外とてひく

敵兵と村つひとぬとゆてく

名とて記小政長十六歳たり

同十七年三月十六日秀吉より豊臣

の姓とて満つり後五位下と叙

左馬助小政長

受長之年と総小佐美の城と移り

二万石と成とて是年が四代と成

たりとあり

同七年十一月二十二日一万石と成

とあり

同十九年九月里見安房守關原乃

と記しけとありとありとあり

とありとありとありとあり

政長又治とありとありとあり

武中乃制法とてしつて越年す
元和元年三月二十五日房列
をひく一万石をくくす

同五年十一月

名法院殿东令より清鷹将の討ま
五千石とくくす

同六年八月二十日田中筑後守率す
嗣子ありしにりく恒とかりあり
制法とてしつてふ筑後守率す

同七年

お軍家の越乃清殿は渡法乃時政と
きくぐひとくゆりは地とてひて
則重乃清勝物を洋飲と

同八年九月二十八日二万六ふる
くくゆり思城よりくく平の
城より奥列を結護す

寛永七年乃夏

將軍家儲池より清極ありく

政名、宅小、せふせふと備ひ、しり
員令二十枚を、ふり家

同八年乃、菱、儲比、し、清、格、あり

ま、政名、宅、入、せ、ふ、備、ひ、員、令、二十
枚、と、清、格、あり

同九年六月二十日、加、藤、原、守、配、流、し

し、し、治、と、け、ふ、備、り、る、中、乃、制、法
を、ま、ご、め、ん、が、し、め、取、後、乃、ま、ご、り、る、家

同年十二月二十八日、延、回、信、下、し、叙、し

二条、新、幸、乃、と、記、法、大、名、官、し、進、也

い、つ、も、政、名、宅、守、清、城、丸、留、守、と、つ、と、し

つ、つ、の、し、し、今、特、治、と、か、り、り、と

昇、進、し

同十年十月十七日、小、卒、し、と、六、十、七、歳

法、名、道、山、院、号、悟、真

同月十九日

將軍、家、初、年、伴、良、守、信、徳、と、清、使、と

し、て、妻、を、と、り、し、と、せ、し、備、り

井上主計政が継よ属せしり

元和元年三月二十又日と総國債費

乃城と海より一万石と納せ

同年乃友大坂再陣乃と酒井

左衛門尉が継よ属し松平丹波守と

おるく森守前守よ高まつと

あひし切ふ事敷別より

をひくを前守つ井よ後免しぬ

元和八年岩城よりうら系討二万石と

くく海りり部く二万石を領免し

つらとくく父が造次と海

りりて平城し恒と

寛永九年作をうけし海りりて

父政者とふるく肥後乃よ

いふ

政次

右兵衛尉早世

政重

右馬助 早世

政晴

兵部少輔 従五位下

寛永九年六月十一日

將軍家より評揚む

同十一年十月又左馬助率寸

比下 同日二十八日奥列 急城

をひて 采比二万石と

同十九年十二月九日 従五位下 叙

頼長

左京亮

寛永六年

名述院殿

將軍家より評揚む

同十二年十二月二十九日 従五位下

叙 左京亮 小領

義貞

東市正

寛永五年

台徳院殿

將軍家より洋儀

頼重

白殿殿

寛永六年

台徳院殿

某

將軍家より海へえししきり

甚為後ふふは御と

甘國回

廣志卿より流之軍功を上げ

事よその十六度たり

事比るびに御又を

い

今度大義に非け方に清回

祝賀の如く物束を給ふ百貫の分
を主の御名譽為名目御返
前々之御分入に
けりお改之御命をさすす之御
少く引合百貫之首尾之御
程考御大御命御返
之本為居之御分入にお束代給
有之とお返の如く

天文十二卯

八月十日

廣忠御判

田原喜云々

條

一 尊為名目之事

一 於野相之石織の石之斗の束を
御前之御親又御命より御分
然と束代ふり之とお返の如く

一 於 相 角 内 米 武 拾 儀 之 新 加 増

ら 多 少

仍 如 件

天文 丙 亥

霜 月 六 日

初 大 後 立 判

田 後 基 之 御 成 旨

右 五 通 乃 院 文 主 之 御 成 旨 始 終 一 貫
一 貫 之 御 成 旨 始 終 一 貫 之 御 成 旨

大 納 言 頼 宣 御 下 之 旨

天 正 三 年 長 祿 合 儀 乃 御 成 旨

大 指 規 乃 御 成 旨 乃 御 成 旨 乃 御 成 旨

極 村 店 右 之 御 成 旨 乃 御 成 旨 乃 御 成 旨

信 康 之 小 御 成 旨 乃 御 成 旨 乃 御 成 旨

大 指 規 乃 御 成 旨 乃 御 成 旨

天 正 八 年 七 月 十 六 日 乃 御 成 旨 乃 御 成 旨

法 名 善 教

志茂乃ら志五右衛門尉と号す
生母冬河法名善候

忠次

志茂後志五右衛門尉と号す
頼宣卿より紀列よりありし
大島の鉅頭と号す

忠清

寛永十七年七月廿九日六十九歳
少く死し法名善樹

合右衛門尉 生國同家

大権現よりくくめつり御小姓
なりし

享和十二年冬久子合我の日記
首級とゆりりて我場より
を乞く石川善物よりあまき成

志次

同十八年小田原陣乃時清使番
の清陣よりきこひきこく浦つ家
らぬら

志次
平左衛門尉 法名栄傑
中園冬河
大権現より清くく浦つ家
法名普應
受者十九年一死と五十七歳
法名普應

志次

志次
平左衛門尉 中園冬河
大権現より清くく浦つ家
与力十清をあらう家

享長十六年ノ死ニシテ威軍七
法名榮威

忠告

平右衛門尉 牛園武彦

右衛門尉

將軍家ヨリノ一ノ一ノ海軍少将

又百石ノ給不

政康

法名忠尉 牛園同家

元和六年ノ一

將軍家ヨリノ一ノ一ノ海軍少将

寛永九年ノ一ノ一ノ海軍少将

忠房

平右衛門尉

元和元年ノ一ノ一ノ海軍少将

ノ一ノ一

同六年糧米とたまふ
同九年沙半院書と清とむ
同十年五百石の地と給ふ
同十八年病ありふよらして小菅清
乃継とあり

忠成

左門

寛永十八年兄忠治やーとひく

忠成

子とて実ハ忠次の子なり

甲印在事尉

はげめ伯父孫次大進と属

上野乃城とあり

天文十一年十二月と旬と織田陣忠

伝秀の五五騎相見とと野の城

とて城中乃共とせしとみは是

うとんととてふとひと忠成忠成

さびらくおほくつり終と合終下の
言名とゆらげらば此正成十六歳あり
四月二十日辰列のまゝひ新業と
つきの兵を率く軍中よと野乃
城を襲してふ二九よ入時正成らと持
百人の古儀紐をつけしりしつて先と
射あり同敵城中といつて志むくお
こつて正成勝よらるるこれと射矢
すでふつとんもむら射しつとつり

童一人ありあるふ正成はよ若くは
矢とらるるべしとふそれ時
童くしりゆとく矢と抱きしる是よ
しりく大よ勝利とゆ敵とせり
死傷するもの二百餘人ある正成はく
弓を射けらるる日豊日廣忠卿
はるをさよしりし我功と感
き備ひしりしりしりし列
相角村しりしりしりしり

伯父孫右衛門もゆけ功と感一七取
振刀をあるふ松平孫右衛門も是と
慶く敵の目貫并とさうく

同年三列安祥の兵と野の城と襲
と此より部将陣頭一ととみ
法率と下知とく競いさう味方突
いであひとくつと此正成味あり
さ記ぶら事二十間ばりありては部将
と録とあせま首ととあふふとひて

敵兵利とくつなひとくしとく
孫右衛門これを感とく鑑とくびよ
眼目をあふふ

弘治三年三列川屋合戦あり此
正成録とくつと敵兵を鑑との首と
ゆとり止らとくつと射殺とのも亦
おり

永禄六年三列本郷寺門徒一揆此
と記とく流五人野寺よりとく針崎

一をひく正成とくんと志多
こころよ正成これを知りし
矢田十郎とせしり旬
敵はふ一人味方五人なり
討事ゆゆふふと正成これ
しでおおたかんと寸ちれども
とくふりあし寸ちりり
正成いよくはくよ五人乃士
今もやふ逃去らんぞと
今もやふ逃去らんぞと

たふすかやとくもや矢田
敵はよひひらんぞ死し
いひりりくちくふをひく
捕らるるがらぬら矢田人
あつたあつた正成あひ捕
討死せんる必定しる
命これに楽うけら一揆の
石川十郎おとるひ小渡
五人

大指現乃沖前よりともみ来る石川
正成が伯父よりちれども敵より終
しりて正成これに射く西勝を貫
石川引退くつわより死せばとて又
渡急源又た毒を射殺ぬ

大指現大よりこれを感てきせしゆふ
時より石川伯耆守教正云と一も
正成教度軍志を励とするも
此よりおとまりつすまはせ終る

ちれとふ

大指現これをちれとてゆふ

同年三列牛窪合戦より牧野等
小坂井よりお強し沖浦と初村の間
をひく味方なを圍り正成をうひ
なりて敵乃ともみし終り射り
鞍乃前輪より後輪ゆへ射費は
しりて敵兵ともみえずしてひ
ちりぞぬ

しらく道のくくくくく伏くれ正成と
みくすくやふくくみすくくく実と
とれ正成これと射て楯を透
くく敵と殺かかかくく敵味方あひ
とといふれと寝

大指現もまゝ感一うせおしまふ

元龜元年織田信長越えあふ玉令侍
一教向一之と向ふと現

大指現涉加跡れああ列一進級一

くくは可くをくく正成進退りか
くく清くくくくくく退
陣乃とく正成去つくくくく
夫六箱とくくくくく列乃甲兵六
人を射殺

大指現大くくこれをくくく

同年姉川合戦一正成あひは
銃とあはあひ敵と射く大
軍志をくくけあくくくく敵無正成

射くところを矢を繕ふ

同三年幸列之方原合戦正成敵

とあひたつて乃同旗下とつる

事とくにいと比時味方先鋒

級せんともあつてをひく正成

をそそく旗下と湯けきむ

大指現涉馬をひくをそそくあひきむ

とつてあつたものまづ七八濟り

正成諫きてあつてあつてあつて

引きあげて時息男を一郎正成敵

陣よつてあつて味方あつてあつて

あつてあつてあつて正成あつてあつて

あつてあつてあつて敵陣よつてあつて

正成あつてあつて敵敵とあつてあつて

あつてあつてあつて敵敵とあつてあつて

あつてあつてあつて敵敵とあつてあつて

あつてあつてあつて敵敵とあつてあつて

あつてあつてあつて敵敵とあつてあつて

天正三年 長篠合戦のとき正成は進
退するもつゝ清うらりりるる退陣
乃別志つゝひともり鎧をまろく
敵とつゝ首級とえつゝ
同四年 武田勝頼遠列横次か
お陣とされと正成物見のまの
りりくは地りりるるすすで小勝頼
川ちりぐく別味あれとおろく是と
あひこかんとすちれども正成く

軍機を察し士卒と諫くたゞは
ふゝ志じ

大指現これとちりや一後

同年 高天神と攻め正成城中よ
矢をくもちておろく敵と殺せ
敵矢をくもちて一矢と射て
友人をくもちて常々射と
あゝすすと云

同八年 遠列 又長篠合戦のとき正成

弓矢を多しと名をよむる

同十二年冬久々合戦ありて正成

召しつけし備えり物見乃者よりて

波比一より敵軍の形勢を察して

そせりていしくしむやふ

大軍と撃つ備りかゝるす勝利あり

とりのちれども味方いまへてあり

あつまるものおかかるとしてうれ殊

こゝろすくたしとこれゆへに諸兵

あひだかゝんとせよこゝにをひく

正成すみこかゝんるをまむく

結ぶく備つこと

大指現るは海しとふりしりし

しりし大し撃て勝利とえ給ふ

うけ翌日正成をやうし軍功を感し

を備ふ沙由陣乃後三ヶ野根村

しひくま比七百とくまへし備ふ

同十八年小田原陣よりまむくひ

正貞の妻吉織田信雄の妻なり

大権現より若正成の對面せんとなす

去るれども正成年老よりゆへにたまふ

穉してつ井よゆえに

安永七年四月松尾栢岡村よりありて

病に嬰時よりけりも

右徳院殿より醫師久志本左京より

命をく療法をくく之を治す事候也

之疾つ井より瘳じりて四月十二日

一死を年七十六 法名善宗

正貞

正一郎

大権現よりつるくゆつるに清小姓と

なり

久龜元年姉川合戦の時より

ひたたくゆつるに戦患をりけり

してより味方川志よりけり時正貞

高きころ乃鏡を敵陣乃中
おし正貞おひあつたき
もけ鏡を人よりわいて後
諸を遺たりしてすまらるる川
り海うく敵陣よいつたれと
ふともよとてれくも鏡と
御の法これ下
かいつは時正貞二十歳あり
大権現これと怒りや
命とく海り刀寸まく死を懼す

そのいさ知をいふ事なり
大まを懲りし海とらま
しるく正貞屏居しる事五六日
ありくろら正成をさされ陣乃
勝利をわきあふら海
正貞の勇正成より方角
海ひともく正貞をさされけ
智をゆきせし海
同之年之方原合戦より

とてより歎仰ふるも首とえり
天正元年淡州とひく村越
左衛門と諱端の事あら正成これと
いふとをり

大権現より云として正貞と遊遊と
おれゆよとて地まより
安永十八年小正貞後府より
書をよみく歳月とをく終

大権現これをききあり正重の似比

乃田よ存しむるよの 作あり
あしをひく終本久右衛門本多
友守郎後友店之郎等乃三人の
りよ正重より告かるゆよこれを
ゆよとく似比栢岡村よ存し
寛永十一年五月十日より死む歳
八十二法名露我

正重

外記

天正十七年十二月

大権現冬別りし御鷹狩乃と記
台加りし祖父正成が地羽角村
に枉りせし御鷹狩乃と記
しけたりとも正成の御鷹狩乃
石一羽を御鷹狩乃は内正重春三月

せし事く正成の宅ありしが

心し正成也

大権現ししと一正重と初

御礼ししと記し正重十二歳あり

同十八年正月後府ししなり

大権現ししと記し正重

同年小田原陣乃と記し

し

大権現乃と記し

文禄元年

名瀬侯殿より一書あり
海陽聚楽より一居り三年
間沓配膳の役をつとむ
お列乃波多野下総乃日
をひく名瀬の百名と
と頼来としてお列
百名と洋館と

文禄五年同原陣乃時 作

よりて沓使とより苗乃縄を
ゆりて

同六年下総乃小金お換の文寶
よりをひく東地千名と

同十六年名瀬の山野下総乃
沓村よりをひく五百名と
同十九年十月役を
弓矢頭より歩卒五十五人

をあげりふ

同年大坂清陣乃と記

名徳院殿より信也と

元和九年と徳小大とよとひく

子石とくくは海に流

寛永三年十月三日辰五位下よ

叙と

同八年四郎乃地をあつとよ武列

栢岡村よりとひくとよと子孫と

此時俵ありけるはこれ祖又正成が願

地より正成死して後又正成が弟

右系進よは海に流る子孫書り

ありては地を没収せしむ正重ハ

正成が嫡孫なり且又勅仕しるも

よこたすすよとひは地よあつた

系地をくくは海に流るよと況祖又

田原るれはこれよと海に流るよと

まよ正重よりけりくもあつた

清成

同九年清持等乃与力十骑

正次

官邸在清成

公使院殿

石をさほり

將軍家

寛永十八年十一月二十三日

死

正吉

正吉

女子

女子

某

佐源

女子

正成

右京進 牛國之河 法名淨安

大指現

台座院殿

正成

正五位下 鐵部正 牛國武藏

大指現より

左より

正俊

新五郎 牛國同家

寛永九年

將軍家より

同十年以半院番を以て

某

友野郎

本多氏より系別より出

某

古原

安藤氏より系別より出

演卷

三列 岩崎 相應寺の住持

忠政

仁吉 赤村

為年より

大権現よりつるく南つるに教度軍

子よりつるめ志より我志よりけり

永禄六年三列一向宗一揆乃と

麾下の諸士より毛浦よりこれと

おるよりより色の杉より

いとも忠政のさうらう軍忠を
しげほし其時津使として將列よ
おろしく海よりしよひく賊船よ建
賊船より鉄炮をきこるよふよふよ
をひく忠政さうらう鉄炮をきこる海
賊乃大船をうらまら守あれよあて強
黨船をきこりてさうらうあれよ
恙たふさく將列よしよ津使さ
よつよめ之列よかあしよしよ

大権現さうらう云とさうらう
感あしよらあさく忠政病あふ
しよ津成さうらうあさくしよ
あしよらあさく國東津入よの後時
たさくあつあ

享和五年國原陣乃と親治を
しよ石川日向あさくあつあ
あ守あさくしよ國原凱旋乃後
大権現後府さうらうあさくあ

作よりくまきびきくゆつる者取
乃地すくびし浄殿支字を給ふ系
同十一年七月十三日駿府よりひく
死と歳七十五 法名教傳

清成

孫之郎 位五位下 修理亮
忠政やーるひく子とと実八竹田家仲
子より濱松よりひくめさく

大権現より清久よりゆつり小母より
享和八年 治よりりく喜山常陸公也
おるく

浄院殿の浄傳

文禄三年位五位下ノ叙一修理亮ノ位
享和六年奉地二万石をゆつる
且与力二十五騎足將百人とあつた
同十二年十月二十日江戸よりひく
年と歳五十四 法名華月

清次

宗右衛門 従五位下 右校守

幼少より

右衛門殿より

侍りしより

常陸守より

備前守

安永五年 従五位下 叙

右校守より

同十二年 又清成卒

うね来地を

存候

元和二年 侍りしより

後守忠利

將軍家より

同三年 七月朔日

清名 免清

女子

なひく二子るの事此を寺傳に記
るはち和合御門乃番とつとむ
寛永三年先法政の事此に記す
と傳に記す房列の事此に記す
此と丸乃る垣の事此に記す
横田御門乃番とつとむ
同六年八月三日に死に歳二十二

小浜氏部少輔光隆の妻

女子

永井信濃守尚政の妻

女子

日向守信成の妻

女子

伴沢隼人正政の妻

女子

本造之房左衛門尉の妻

重頼 しげちか

跡三郎

母板倉因防守重宗女

寛永七年父正勝が米比をうらた

すも里房列をひく五子と

領し時重頼三歳と

同十二年三月二十八日

將軍家一編

女子

母と一おる

水野守行の妻

忠重 しげしげ

志十郎 浪五郎下 伊賀守 後

志摩守と一おる

同七年

名徳院殿

同七年 志摩守と一おる 景勝孫叛の時下野園

宇都宮より借書一冊後信列

高田より吉原へ行く舟の御用件乃

乃らお模写をひく食邑三百石を

くぬき

同十五年正月十三日信を明し

將軍ありつてくぬき舟の時より忠重

二十又歳なり

元和九年津入海の事記後忠重下り

叙とる舟より常陸公をひく船地

くぬき舟

寛永十年米代をくぬき志列舟船

舟の備り舟船くぬき五千人舟

同十九年三月十八日信より

名々志列舟守とくぬき舟

政名

仁吉浦村

寛文十二年

仁吉院殿よりくぬき舟の御用件

竹千代君は清久とて侍る

同十九年四月十七日

將軍家日光御社参あり政次

竹千代君の侍使として日光より参

と記述ありて後又侍下と叙す

忠政

玄太席 従五位下 飛騨守

寛永四年四月十一日

將軍家より賜ふ侍り

同十二年十二月二十八日 従五位下

叙す

忠吉

之助

寛永七年二月朔日

將軍家より賜ふ侍り

忠清

三十一郎

寛永七年二月朔日見忠名とおろく
將軍家と相礼し

同十八年八月九日

將軍家の傳をうりあたまのしるし

竹千代君と洋紙 御太刀目録を

とくゆつふ

女子

池田常乃右衛門の妻

女子

相馬大膳定義胤の妻

家紋

下藤丸

